

『東京市公園改良設計調査報告書』

東京市役所庶務課 [編]

1910年／菊判変型／55頁＋図集／図書番号 OB-74

日本では1873(明治6)年以降、公園の開設・整備が進められたが、東京市は1908(明治41)年に東京市公園改良委員会を設置した。改良設計調査にあたった理学博士・松村任三、林学博士・本多静六、同・白澤保美、中鉢美明、渡瀬寅次郎の5氏は、1910年3月までに4回の報告書を提出した。本書はその報告書を蒐輯したものである。

報告書前半の「東京市公園改良設計方針説明」では、本多が、公園の種類について庭園史を踏まえて解説し、改良設計方針について述べている。

庭園または公園の方式は、まず、幾何学的な区割り、直線の道路や水路、列状の草木など規則正しさを特徴とする「幾何学式庭園」と、山河池沼、草木その他自然の風景を模して造られる不規則で曲線的な「自然式庭園」に大別される。

そして、庭園史に沿って4種の庭園を解説する。

第1は、エジプト時代から始まった幾何学式庭園であるアラビア式庭園で、バビロンの空中花園が例として挙げられている。

第2のローマ式庭園は、イタリアなど欧州諸国に見られ、その発達した形がフランス式庭園である。正円形の噴水や規則正しい並木・刈込み、石像などが据えられ、ヴェルサイユの庭園が代表的である。そして、この方式は、建設費が過大となることや、「ただ眼を喜ばしむる燦然たる美をもって主目的となし」、園内における適意、安楽、便宜は第二に置かれていることを指摘している。

第3の英国式庭園は、17世紀頃英国で始まり、欧州にも普及したが、広闊なる芝生に野生の樹木が点生しているような自然林野の景をとる。

第4の近世式(または折衷式)は、20世紀に入って欧米各国で新しく造られる、ある程度大規模の公園に広く用いられている方式である。天然の地形に応じて、先の各方式を適当に折衷する。

そして日本庭園については、自然を模す精神は英国式に似ているが、箱庭的で、矯めた樹木を用いる人工的な面や、居間や客間から見て正面となるよう造られるといった特徴から、大公園には不向きであることを指摘している。

その上で、「公衆の慰楽を期すべきところ」は、自然的過ぎず、人工的過ぎない方式がよく、本邦固有の庭園の趣味をも顧み、近世式折衷式に日本式を加えた「日本風近世式」または「日本風折衷式」と称する方式を採用するとしている。

そして、その方針の下に、12の公園(芝及愛宕山公園、浅草公園、深川公園、坂本町公園、待乳山公園、御茶ノ水公園飛び地、下谷公園、緑町公園、清水谷公園、湯島公園、飛鳥山公園、日比谷公園)の改良・設計方針が、その細目、設計図面とともに掲載されている。

たとえば、芝公園を愛宕公園と連結し、もとの自然・建物を生かしつつ、廃頽寺院の整理、散策路の整備等を行うこと、浅草公園は家屋を整理し、花木を植え付けること等が提起されている。日比谷公園は開園後5年ほどであったが、凱旋道路の新設に伴う門の移設と園内車馬道の変更の他、運動場と芝生地の場合の交換などが提案されている。

各公園の個性に合わせた設計がなされたが、財政事情などもあって改良の進捗は順調ではなかった。

(中嶋いづみ・市政専門図書館企画調査室主幹)